

# ラドヤード・キプリング『ジャングル・ブック』とポストコロニアルワード —コーパスと言語・構造の視座から—

## Post-Colonial Word and Rudyard Kipling's *The Jungle Book*: From the Perspective of Corpus, Language and Structure

深津 勇仁

FUKATSU Yujin

本研究は、イギリス人小説家ラドヤード・キプリングの短編小説、『ジャングル・ブック』のテキストをもとにして、コーパス検証型研究の方法論を用いて、ポストコロニアルワードを量的に抽出することを目的とする。同作は、欧米の文学者の手によって東洋社会を画一的に描いた植民地文学であると、エドワード・サイドによって定義されている。本研究は、サイドのポストコロニアル文学の議論を出発点として、同作におけるポストコロニアルワードと既存の大型コーパスである British National Corpus (BNC) との比較の結果、5%水準での有意差が確認された語をベンチマークとする。検定に際しては、コンピュータ言語Rを使用しフィッシャーの正確検定を実施し、テキスト分析に際してはKH Coderを使用した。さらに本研究では計量研究を補足する形で、質的分析である構造分析の手法を用いて登場人物を類型化し、質と量を混交して結果を整理する。

キーワード：『ジャングル・ブック』、コーパス検証型研究、植民地文学、計量言語学、構造分析

### 1. はじめに

イギリス人小説家、ラドヤード・キプリングの短編小説である『ジャングル・ブック』は、1894年に出版され、翌1895年には、続編である『続ジャングル・ブック』が出版された。同作はインドを舞台とした冒険活劇で、著者のキプリングが、幼少期に過ごしたインドでの原体験が背景となっていると言われている。

主人公の少年モウグリは、狼によって発見され育てられ、ジャングルの中で人間の身なりをしたまま動物コミュニティに自身の居場所を見つけ、兄弟の狼達と成長していく中で、黒ヒョウのバギーラや熊のバルーに支えられながら、宿敵シーア・カーンを打倒し、成長を遂げるという筋書きである。短編小説という性質のため、モウグリを中心とした数本の物語によって作品が成り立っている。シーア・カーンを打倒した後は、ジャングル近くの村で偶然に遭遇した実の母親とのしばしの生活を経て、モウグリは自身のいるべき場所は人間コミュニティではなく、ジャングルであることを再確認する。人間と馴染めなかったモウグリは、自身が狼によって育てられた森林の住人であることを深く理解し、再び大自然の中に身を置くことを決意する。同作の特徴は、インドの大自然とそこで独自のコミュニティを形成し、相応の秩序を築いている動物達のいきいきとした世界観にある。周囲の村に居住する人間は、その秩序を破壊する可能性を持った脅威として対立的な存在として描かれている。特に、村の人間達は非科学的で、超常現象に心惑わされる非合理的な人々として描かれる。後年出版される『少年キム』と同様に、キプリングはインドの土着の人々を科学文明とは相容れない原始的な人々として認識していたといえる。

### 2. 植民地文学とコーパス研究

『ジャングル・ブック』は、インドの文化や風習をモウグリという第三者の視点から客観的に描いている。これは、モウグリをインド外からの異邦人、つまりは西洋人と同じ視点に置き、オリエントを客体化し一般化するように作用する。この視点によって書かれた英文学を、エドワード・サイドは、オリエンタリズムと名付ける。サイド(1993)はオリエンタリズムを、「東洋人の世界の認知可能性と自己確認とは、東洋人自身の努力によってもたらされたものではなく、むしろ、西洋がオリエントというものを同定するにあたって、認知作業の技術的

操作のために採用した複合的手続きの総体によってもたらされたものである。」と説明する<sup>(1)</sup>。このオリエンタリズムの概念を起点として、サイド(1998)は様々な英文学作品と作家をとりあげ、イギリス帝国主義による東洋植民地支配を背景にした文学作品を、帝国主義文学と位置づけている。この観点からサイドは、キプリングを典型的な帝国主義的作家と位置付ける。サイド(1998)は、キプリングの作品群の中でも『少年キム』を代表的な植民地文学として論じているが、間接的にその他の作品でも、「インド人にはイギリスによる指導と保護が明らかに必要であることを説くキプリングのような小説が登場する」と前置きし、「イギリスがなければインドは頹廢と低開発状態にとどまりつづけるというわけだ。」とインドを舞台とした『ジャングル・ブック』に関しても間接的に、植民地を低位に置く帝国主義と指摘する<sup>(2)</sup>。このように本研究では、サイドのオリエンタリズムの概念を基盤とし、『ジャングル・ブック』が帝国主義文学であるとの前提で、考察を進めていく。

文学テキストの研究に際しては、従来の文学理論を前提とした質的研究に加えて、近年はコーパスを使用した語彙頻度の計量研究が、積極的に行われるようになってきている。マケナリー&ハーディー(2014)は、文学研究におけるテキスト分析のみならず、人文科学や社会科学の研究分野を横断して、コーパスが応用可能な手法であることを指摘した<sup>(3)</sup>。石川(2012)では、テキスト分析におけるコーパスの有効性を認めた上で、その研究手順を理論、仮説構築、コーパス観察、仮説観察に整理した<sup>(4)</sup>。また、石川(2008)は、コーパス研究の具体的な方法論を解説したうえで、有意水準を5%に設定し、検定を行った結果を解説している<sup>(5)</sup>。以下では、上記の手順を踏襲して、『ジャングル・ブック』が帝国主義文学で、かつオリエンタリズムの理論で説明可能であるとの前提で、語彙を分析する。

### 3. 『ジャングル・ブック』の頻度順語彙リスト上位150

表1は、『ジャングル・ブック』のテキストデータをインターネット上のProject Gutenbergよりダウンロードし、KH Coderで頻度別に分類し、検索頻度上位150語までをリスト化したものである。

Words	Frequency	Words	Frequency	Words	Frequency
he	2104	again	88	well	50
be	1798	KHAN	86	N/A	
I	808	SHERE	86	other	49
they	672	<u>kill</u>	<u>85</u>	<u>white</u>	<u>49</u>
have	640	away	83	boy	47
say	484	old	83	leave	47
not	406	eye	82	place	47
it	394	give	80	speak	47
you	359	night	80	up	47
we	338	Kotick	78	let	46
do	282	wolf	77	TEDDY	46
go	274	good	73	mother	45
come	242	LITTLE	73	once	45
<u>man</u>	<u>239</u>	<u>people</u>	<u>73</u>	round	45
MOWGLI	221	only	70	thou	45
when	212	take	70	child	44
my	188	day	69	monkey	44

then	178	here	69	own	44
know	174	cub	68	tikkus	44
see	170	down	67	stand	44
what	151	himself	66	thee	44
little	146	Wolf	66	break	43
that	146	KALA	65	word	43
who	139	think	65	Illustration	42
very	138	tail	64	rikki-tikki	42
look	133	great	62	turn	42
head	132	way	62	year	42
BAGHEERA	130	how	61	BROTHER	41
she	129	too	61	ever	41
make	126	begin	60	grow	41
<u>jungle</u>	<u>119</u>	just	60	more	41
elephant	117	pack	60	NAGAINA	41
never	116	sit	60	put	41
where	112	Akela	59	sleep	41
time	110	KAA	59	thy	41
now	107	more	58	end	40
so	105	call	56	neck	40
big	101	fight	56	remember	40
tell	100	keep	56	lie	39
Baloo	98	last	56	always	38
thing	97	still	56	branch	38
N/A		find	55	afraid	37
run	95	as	53	catch	37
get	94	eat	53	even	37
seal	93	there	53	life	37
back	91	young	53	long	37
hear	91	-LSB-	50	tiger	37
foot	90	SEA	50	tree	37
NAG	89	side	50	water	37
TOOMAI	89	together	50	<u>wild</u>	<u>37</u>

表1 『ジャングル・ブック』の頻度順上位150語

表1を参照すると、帝国主義文学としての特徴語と認識できるものは、man, jungle, kill, people, white, wildである。この6つの語を以下で確認する。名詞 man は (1. 男、男の子 2. 人、人間 3. 使用人、従業員、労働者) といった意味で、『ジャングル・ブック』においては2の「人間」、「人」を意味する。テキスト全体では239回使用されており、重要なキーワードであると言える。具体的な使用例としては、動物が人間を食べることを禁止している、という掟を紹介する場面があげられる。...forbids every beast to eat Man except when he is killing to

show his children how to kill. この場面での man は、全文の beast と対比構造になっており、明確に人間と動物が区別されている。その他には、冒頭で、モウグリが狼によって拾われたシーンで、狼達がしきりにモウグリを man's cub と称しているが、その man も人間を意味する。このように、動物の視点によって語られる man は、人間を意味する場合においては、動物と人間を暗黙のうちに区別するように使用される。キプリングの描く動物が、自然との調和を重視したコミュニティの秩序を守るものである一方、人間は環境や自然を無視して無制限に拡大していく無分別なものとして描かれる。この対立構造は、冒頭から中盤までの物語の展開によって徐々に固定化されていく。man に関連した表現では、white men という語が4回検出され、インドに居住する白人に関しても、言及されている。He did not know much of white men, but Petersen Sahib was the greatest white man in the world. と、インドでのイギリス人の存在にも言及されている。white man によってインドの現地人と白人が対極に位置づけられていることが理解できる。動物と人間の大きな対立構造の中に、さらにミクロ的な白人と現地インド人との区別が、構造として確認できる。

次に、名詞 jungle (1. 密林、ジャングル) のテキストでの使用例をみていく。jungle は119回検出される。また、タイトルの The Jungle Book にもあるように、ストーリーは大部分が密林に住む動物を擬人化している。ジャングルそのものがコミュニティであり、その秩序は、the Law of the Jungle と表現され、人間の捕食禁止や乾季の川べりでの動物間の争いの禁止、といった規則が存在する。また、ジャングル (jungle) は村 (village) と対比的に位置づけられている。動物を擬人化した jungle people、という表現も複数箇所確認できる。例えば、None of the Jungle People like being disturbed. や...whenever one of the Jungle People hunts outside his own grounds. のようにジャングルの人=動物といった関係が成立している。ジャングルに住む動物が、独自のルールや慣習を共通事項として、集団内の秩序を合理的に保つよう、相互に調整している理性的な住人であると言うことが、この jungle people という擬人化表現に滲みでている。

動詞・名詞が同形の kill (1. 殺す 死なせる) は、本文で85回検出される。進行形の ing、過去形の ed、複数形の s、がついた場合では、100回まで増加する。この kill の使用パターンは、3種類に区別可能である。まずは、動物が動物を殺害するパターンである。基本的には、動物は、ジャングルで必要以上の獲物の捕獲を行ってはず、生存するために必要最低限の殺害が認められているのみである。また、人間の殺害禁止という掟も存在する。これは、ジャングルで狼によってモウグリが発見された際も、To kill a naked cub is shame. とその行為を抑止する声があがっていることから窺える。例外的に、人間を殺害する場合もあるようだが、...never orders anything without a reason, forbids every beast to eat Man except when he is killing to show his children how to kill, and then he must hunt outside the hunting-grounds of his pack or tribe. のように、限定条件が付与されている。その他にも、過剰な争いが起こらない様に、乾季の休戦協定といった暗黙のルールがジャングル内の慣習として存在している中で、その秩序を脅かすシーア・カーンのような存在は、殺害 (kill) という形で集団より排除される。獐猛な虎、Shere Khan said he would kill—would kill! のように、簡単に他の動物の殺害をほのめかす脅威となる存在として認識され、結果的に、モウグリは計略によってバッファローの群れに踏殺される。このように、動物の世界における殺害 (kill) は、狩猟の訓練や最低限の生活のためと、脅威の排除の2種類に分類されている。テキストでみられるもう1つの kill の使用例は、人間間の殺害パターンである。一時、村での生活を余儀なくされたモウグリは、その超人的な身体能力が異端とみなされ、村のコミュニティから排除される。その場面で I do not believe, but go away or they will kill thee. と主張するように、人間は人間を娯楽のために殺す野蛮な生命体である、というモウグリの見解が述べられている。このように、kill という語だけをみても、動物間では2種類の、人間間では1種類の kill、が存在していることが理解できた。

次に、名詞 people (1. 人々 2. 動物と区別しての人間) の使用例をみていく。この語は、テキストで73回検出されており、2の動物と区別しての人間、という言い方よりも、大半は擬人化された動物 (狼)、に対して使

用される。例えば冒頭での free people は、ジャングルの中を自由に動き回る狼の集団、を意味している。他にもヘビを指した the snake people や、サルを指した the monkey people、といった表現が、動物を擬人化する。また、ジャングルの住人一般をさした jungle people という表現も使われる。作中では、一貫してジャングルに住む動物は擬人化されており、狼やヘビ、サルに people が使用されており、通常の人間と同じく意志を持った生物として描かれる。この結果、people という語が多く使用されていると考えられる。

ここからは白人と関連する white、という語の使用例を考察していく。形容詞 white (1. 白い、白色の 2. 白色人種の、白人支配の) は、49回検出され、そのうち8回が白人を意味する white man (men) の使用例である。具体的には、What's the matter with white men? や Most of the white men, I know, have things in their pockets. といった記述が確認できる。他にも、Besides, white men who haven't a place to sleep in are more than likely to be thieves. といった貧乏な白人は、泥棒になるより他はないといった記述も確認できる。その他には、...the arrival of white men on elephants, with guns, and hundreds of brown men with gongs and rockets and torches. という表現に注目する。白人は象の上に乗って銃を持ち、ドラや火矢、たいまつを持った黒人を従えてやってくる威圧的な人種という描写である。ここから白人は、ジャングルでも恐れられており、象の上に乗ってインドの黒人を従者として引き連れた、最上位の人間として描かれる。この暗黙の、白人を上位とした階層構造が、キプリングの帝国主義的な思想を反映していると、サイドは論じているのである。その他の、人間以外に使用される white は、単純に色を意味しており、white seal, white slug のような、白い動物を表現する際に使用される。ここでは、人間の世界において white men と brown men の2種類の人種が存在し、前者が後者を従える、という主従関係が成立していることが窺える。この人間世界での階層構造は、動物界での平等社会とは正反対である。

形容詞 wild (1. 野生の 2. 荒れ果てた 3. 未開の、野蛮な) は、37回検出されており、主に1の野生を意味している。具体的な表現としては、wild creature, wild buffalo, wild bees, wild boar, wild elephant のような野生動物を意味した表現、その他には、wild wheat や wild honey といった、天然の食物を意味する使用例もみられる。このように wild は、ジャングルがまだ人間の手に染まっておらず、野生に溢れた地であることをイメージさせる語である。

#### 4. 『ジャングル・ブック』の品詞別語彙リスト上位50

表2は、『ジャングル・ブック』のテキストから、KH Coder を使用して検出された語を品詞別に分類し、上位50語までをリスト化したものである。以下では名詞、固有名詞、形容詞、副詞、動詞、の順に帝国主義文学という観点から、注目すべき高頻度の品詞を確認していく。まず名詞に関しては、先述した名詞 man239回、jungle119回、people73回といった高頻度で、検出された物語のコアとなるキーワードがあげられる。ここからは名詞 law (1. 法律、法規 2. 慣習、習わし) 34回検出、を確認していく。テキストでは law の使用例は、the Law of the Jungle (ジャングルの習わし、慣習) といった使い方、またはそれに準じた使い方が主である。頻度別上位150語には含まれていなかったが、34回は注目すべきである。

固有名詞では主人公の Mowgli が221回、モウグリ指南役ともいえる黒ヒョウの Bagheera が130回、同じく相談役の熊 Baloo が98回、という頻度であった。その他では、ジャングルで最も恐れられていたモウグリの宿敵、虎の Shere Khan は、86回検出された。これらの固有名詞は、物語で重要な役割を担っているため、高頻度で検出されたと理解できる。また、wolf が66回検出されたが、これはモウグリとその狼の集団に関する物語のコアをなす語であるからと考えられる。

形容詞 white が、白人を意味する場面で多く使用されていたことは既に確認したが、49回の頻度は注目すべきである。また、頻度は決して多いとは言えないが、dark (1. 暗い、闇の 2. 黒ずんだ 3. 腹黒い 4. 憂鬱な) が



21回使用されている。『ジャングル・ブック』、における dark は『闇の奥』における dark とは意味合いが少し違っており、基本的には景色や夜の暗さを意味している。具体的な使用例をみると、...in the dark valley, into the dark warm heart of the forest, by dark night. のように「暗闇」をイメージする語である。

black に関しては、固有名詞の black は black panther、つまり黒ヒョウのバギーラや black snake を意味している。名詞の black (1. 黒い、暗黒の 2. 黒人の) は、20回検出され、全て「黒い」という意味で用いられるが、人間に対して黒人を意味する使用例は、1回のみである。Ways of elephants are beyond the wit of any man, black or white, to fathom. という文脈で、人間一般を白人と黒人に二分する表現のみが確認できた。

Noun	Frequency	ProperNoun	Frequency	Adj	Frequency
<u>man</u>	239	<u>MOWGLI</u>	221	little	146
head	132	<u>BAGHEERA</u>	130	big	101
<u>jungle</u>	119	<u>Baloo</u>	98	old	83
elephant	117	NAG	89	good	73
time	110	TOOMAI	89	great	62
thing	97	<u>KHAN</u>	86	more	58
N/A		<u>SHERE</u>	86	last	56
seal	93	Kotick	78	young	53
foot	90	LITTLE	73	other	49
eye	82	<u>Wolf</u>	66	<u>white</u>	49
night	80	KALA	65	thou	45
wolf	77	Akela	59	own	44
<u>people</u>	73	KAA	59	rikki-tikki	42
day	69	N/A		afraid	37
cub	68	SEA	50	long	37
tail	64	TEDDY	46	wild	37
way	62	Illustration	42	dead	34
pack	60	BROTHER	41	full	29
side	50	NAGAINA	41	new	29
boy	47	N/A		angry	26
place	47	Sahib	35	first	26
mother	45	Billy	34	next	25
round	45	DARZEE	32	red	24
child	44	COUNCIL	30	many	22
monkey	44	Father	29	true	22
rikkitikkus	44	Petersen	29	<u>dark</u>	21
word	43	MOTHER	27	bad	20
year	42	N/A		<u>black</u>	20
thy	41	Tabaqui	24	such	20
end	40	BULDEO	22	deep	18
neck	40	Jungle	21	heavy	18

branch	38	ROCK	21	least	18
life	37	Gray	19	much	18
tiger	37	Novastoshnah	19	dry	16
tree	37	Catch	17	few	16
water	37	Matkah	16	quiet	16
N/A		N/A		wise	16
mule	36	Black	15	better	15
beach	35	Monkey	15	brown	15
ground	35	Thou	15	clear	15
mile	35	COW	14	foolish	15
nothing	35	Free	13	hard	15
village	35	Messua	13	ready	15
hand	34	People	13	same	15
law	34	Waingunga	13	warm	15
shoulder	34	Dick	12	gray	14
father	33	Keddah	12	sure	14
line	33	LUKANNON	12	green	13
back	32	Rama	12	hungry	13
wall	32	Rikki	12	naked	13

表2 『ジャングル・ブック』の品詞別語彙リスト

## 5. 『ジャングル・ブック』における共起ネットワーク

図1は、『ジャングル・ブック』における共起ネットワークを、KH Coderを使用して作成したものである。ここでは、作中で重要な役割を担っているキャラクターを中心に、考察していく。まずモウグリ指南役、相談役のような役割で、ジャングルの掟を教えてきた黒ヒヨウの Bagheer と、熊の Baloo が相互に関連性のある1つのグループを形成している。これは、両キャラクターが同じタイミングで登場していたことにも由来する。他に、モウグリ周囲で、ともにジャングルで成長を遂げてきた young wolf の存在が挙げられる。幼少期を共に過ごしてきた狼の兄弟は、モウグリとの関係が深い。モウグリにとっての宿敵、虎の Shere Khan も、意味のある共起ネットワークを形成している。これらのキャラクターと比較すると、重要性は下がるものの、white seal(白アザラシ)も、意味のある共起表現として確認できる。これらが、モウグリ周辺に登場する重要なキャラクターといえるだろう。

主人公のモウグリに関しては、冒頭でジャングルの狼やバギーラ、バルーといった動物に拾われた場面では、man cub (人間の子供) と、形容されていた。図1では、man cub speak という表現で共起ネットワークが形成されている。人間の子供が話す、という意味の塊が検出された。同様のパターンは、固有名詞が Mowgli という動物によって名付けられたあとにも確認できる。固有名詞 Mowgli が、動詞 say と関連していることから、Mowgli say という共起表現も多い。主人公のモウグリ(人間の子供)、に続く動詞が speak と say という「話す」を意味する品詞なのは、小説の特徴でもある。図1をみて、主人公やその周辺に位置する動物の固有名詞が共起表現として意味のある塊をなしていることは確認できたが、物語の構造上、動物と対になっているはずの人間を意味する語が検出されなかったことは、予想外であった。図1から確認できる man は、冒頭でモウグリを意味する man cub という表現であるため、人間を意味する man とは異なっている。少なくとも、共起ネットワーク

を形成するだけの意味の塊にはなっていないのだろう。

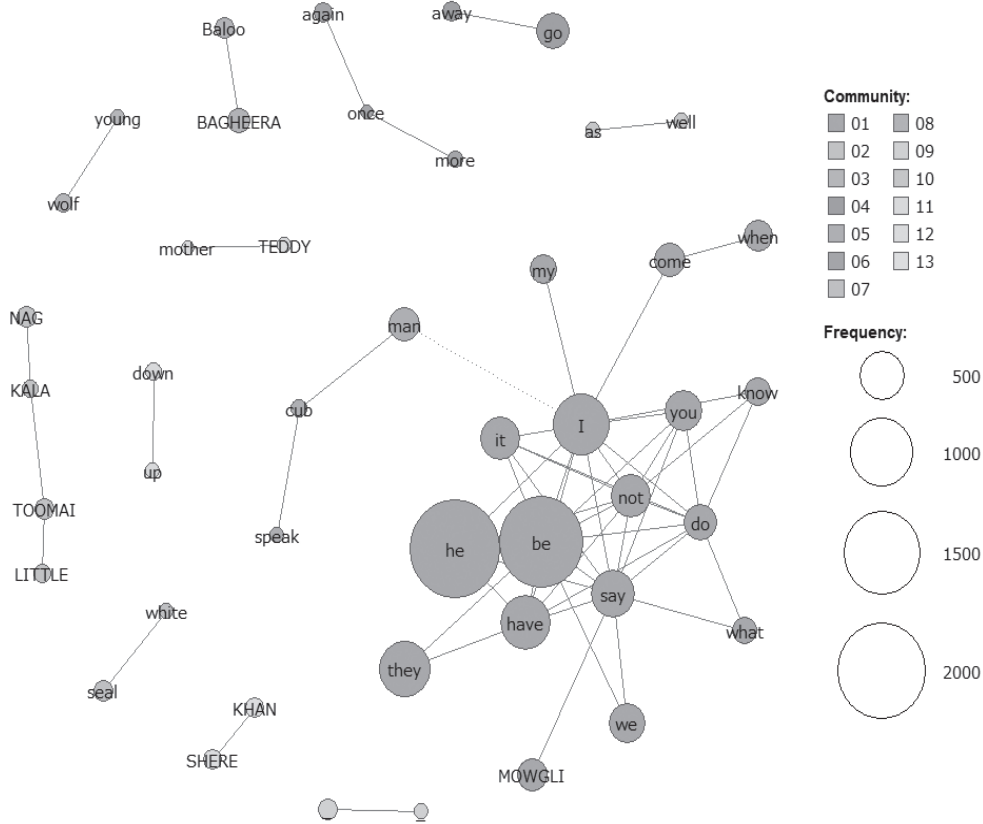


図1 『ジャングル・ブック』の共起ネットワーク

### 6. 『ジャングル・ブック』における対応分析結果

図2は、『ジャングル・ブック』における対応分析を行った結果である。原点 (0,0) の近辺には well, where, they, never といった副詞が中心に位置している。対応分析は、原点から離れれば離れるほど意味のある語として認識される。下方の横軸 -1、縦軸 -1.8に位置している固有名詞 LITTLE と、横軸 -1、縦軸 -2の TOOMAI は共に意味のある特徴的な塊として認識できる。Little Toomai と Big Toomai は、共に「象」を意味する語である。Little Toomai が小さな象であり、Big Toomai が大きな象で、モウグリと大きく関係するキャラクターである。Shere Khan という固有名詞は、横軸 0、縦軸 1 近辺に位置しており、少し原点より上方に偏っている。また、jungle という名詞も横軸 0、縦軸 1 で原点よりも上に位置している。図2から理解できるように、原点より上方に Shere Khan や jungle といった重要語が検出される一方、下方にも象の Little Toomai が検出できる。



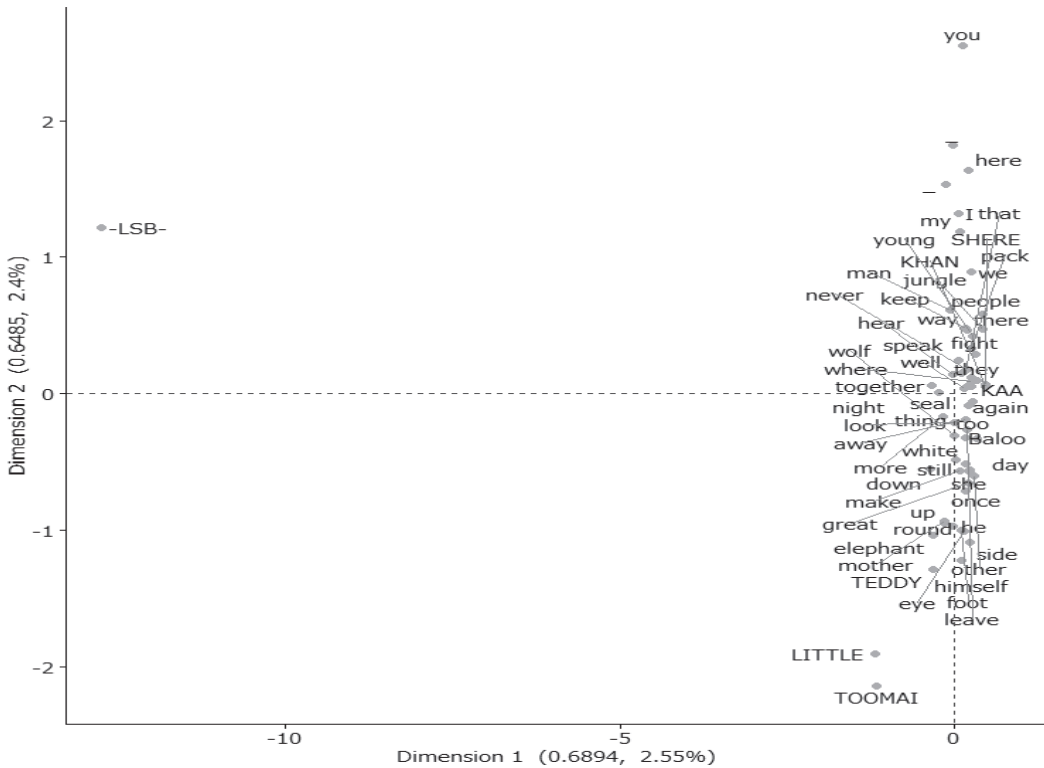


図2 『ジャングル・ブック』と対応分析図

### 7. 『ジャングル・ブック』とコーパス検証

ここからは、『ジャングル・ブック』のテキストから検出された語を、先述した重要語も参照しながら、British National Corpus (BNC) の語と頻度差を比較し、有意差が検出された語を中心に考察する。手順に関しては先ほども解説したとおり、テキストの語を対象コーパス、BNCの語を参照コーパスとし、コンピュータ言語の R を使用してフィッシャーの正確検定を実施した。また、有意水準は5%に設定した。表3は、対象コーパスとなる『ジャングル・ブック』のテキストから抽出した対象語の出現頻度と、それが1万語単位で出現する際の頻度、並びに BNC における同語彙の出現頻度と、それが1万語単位で出現する際の頻度を計算した結果である。

The Jungle Book	Raw Data	Frequency per 10,000words	BNC Frequency	Word Frequency	Frequency per 10,000words
man	239	46.77	man	54493	6.19
people	86	16.83	people	100296	11.4
West (方角のみ)	3	0.59	West (方角のみ)	20030	2.27
East (方角のみ)	1	0.2	East (方角のみ)	16390	1.86
slave	0	N/A	slave	859	0.09
Indian	10	1.96	Indian	3908	0.44

native	11	2.15	native	2567	0.29
India	11	2.15	India	4484	0.51
white	50	9.78	white	21836	2.48
government	9	1.76	government	58758	6.68
savage	7	1.37	savage	1096	0.12
jungle	119	23.29	jungle	885	0.1
property	1	0.2	property	12024	1.36
border	3	0.59	border	3770	0.42
Afghanistan	3	0.59	Afghanistan	631	0.07
free	24	4.7	free	19281	2.19
kill	85	16.63	kill	4091	0.46
総ワード数	51,144		総ワード数	87,903,571	
追加ワード					
beast	28	5.47	beast	847	0.1
gun	28	5.47	gun	3082	0.35
hill	28	5.47	hill	6340	0.72
hunt	28	5.47	hunt	2497	0.28

表3 『ジャングル・ブック』とBNCの語彙頻度

表3で例示した、『ジャングル・ブック』における語の語彙頻度を、英国一般の書き言葉の出現頻度と比較するためにBritish National Corpus(BNC)と比較した。検定のためにコンピュータ言語のRを使用してフィッシャーの正確検定を実施した。『ジャングル・ブック』を対象コーパス(The Jungle Book Corpus)とし、BNCを参照コーパスとした。検定のための有意水準は、5% ( $\alpha=0.05$ ) に設定し、計算を行った結果が表の4である。まず、単語manの頻度は、コーパスThe Jungle Book Corpus, British National Corpus間において、有意水準5%で差があった ( $df=1, p<0.05$ )。結果、単語manの出現頻度は両コーパス間で「頻度差が無い」という帰無仮説は棄却された。単語white, jungle, killの頻度に関しても、コーパスThe Jungle Book Corpus, British National Corpus間において、有意水準5%で差があった ( $df=1, p<0.05$ )。結果、単語white, jungle, killの出現頻度は、両コーパス間で「頻度差が無い」、という帰無仮説は棄却された。整理すると、単語man, white, jungle, killの4つの語が、『ジャングル・ブック』のテキストにおいては、一般の英国の書き言葉と比較して多く使用されていることが理解できた。

Words (The Jungle Book)	df (自由度)	p-value (p 値)	The Jungle Book Corpus (対象コーパス) British National Corpus (参照コーパス)
man	1	$p=.00000000557$	The Jungle Book Corpus > BNC Corpus
white	1	$p=.03852$	The Jungle Book Corpus > BNC Corpus
jungle	1	$p=.0000002354$	The Jungle Book Corpus > BNC Corpus
kill	1	$p=.000007513$	The Jungle Book Corpus > BNC Corpus

表4 『ジャングル・ブック』と特徴語

## 8. 『ジャングル・ブック』と記号論四辺形

ここからは、図3を中心として登場人物の関係を構造化し、有意差が検出された語との関連性を調べていく。

グレマス (1988) は、物語の登場人物を記号化し、その関係性を構造化することで、物語には一定の法則性が存在することを指摘した<sup>(6)</sup>。具体的には、起点となる人物を決定し、それに隣接する記号を相反項と含意関係、対極に位置する記号を矛盾項、として四辺形図を構成する。この概念を応用して図3を作成した。

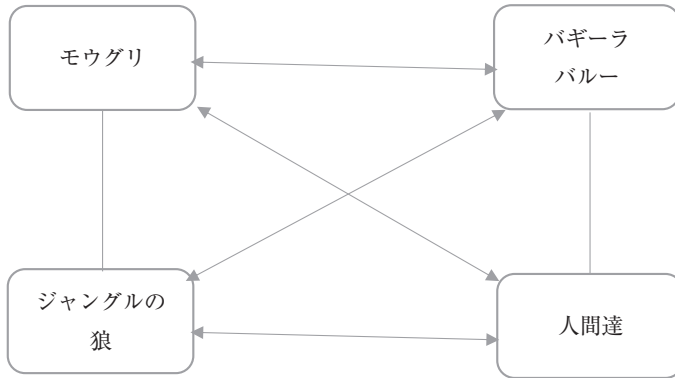


図3 『ジャングル・ブック』と記号論四辺形図

図3の起点は、人間でありながら、動物とジャングルで生まれ育ったモウグリである。人間のモウグリと、兄弟同様に育てられたジャングルの狼は、その生い立ちや生活環境の類似点から含意関係にある。モウグリは指南役である黒ヒョウバギーラや、熊のバルーは種族こそ違いますが、同じジャングルの住人として相反項の関係にある。最終的に、モウグリとは同じ人間でありながら、生活環境や生い立ちが異なる人間達とは相容れない部分が多すぎるため、矛盾項の関係にあると、結論づけることが可能である。このように、モウグリは人間でありながら、ジャングルの動物の声を聞くことができる稀有な存在であるため、動物との共通点が多くみられる一方で、人間達とは、民族的な共通点しか持たないことから、上記のような構造が完成したと言えるだろう。

この構造上の登場人物に、先述した4語を当てはめると、man はモウグリ、人間を指していることが指摘できる。white に関して、white man という表現が、先述の通り、人間の中でも白人を意味する使用例で多く検出でき、モウグリや人間を意味している。jungle に関しては、モウグリや動物の生活環境であり物語の舞台でもある。kill に関しては、モウグリを含めた動物の捕食と、人間が人間を殺害しているというモウグリ証言からも窺えるように、お互いの生存をかけた戦いを暗示する語と言える。このように、上記の構造を参考にすると、有意差が確認できた4語に関しては、これらのキャラクターを語るうえで必須の語であると言えるだろう。

## 9. おわりに

本研究では、テキストマイニングソフトのKH Coderを使用して、『ジャングル・ブック』のテキストから帝国主義文学、並びにオリエンタリズムの理論に共通する特徴語を抽出し、頻度別ランクを作成し、BNCとの語彙頻度差を測定した。その中から、同作の特徴ともいえる語を4語検出し、質的分析手法と組み合わせることで、量的研究と混淆した。今後は、その他の帝国主義文学のテキストを分析することで、オリエンタリズムの理論を象徴する語彙リストを作成することを目標としている。また、そのリストをもとに、様々な文学作品やテキストの測定を行いたい。

### 註

(1) エドワード・サイード (1993). 『オリエンタリズム』, 平凡社ライブラリー, p. 100

- (2) エドワード・サイード (1998). 『文化と帝国主義 1』, みすず書房, p. 306
- (3) トニー・マケナリー & アンドリュー・ハーディー (2014). 『概説コーパス言語学 手法・理論・実践』, ひつじ書房, p. 341
- (4) 石川慎一郎 (2012). 『ベーシックコーパス言語学』, ひつじ書房, p. 30
- (5) 石川慎一郎 (2008). 『英語コーパスと言語教育データとしてのテキスト』, 大修館書店, p. 92
- (6) A. J. グレマス (1988). 『構造意味論—方法の探求』, 紀伊国屋書店

#### 参考文献

- 石川慎一郎 (2008) 『英語コーパスと言語教育—データとしてのテキスト』 大修館書店
- 石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠 (2010) 『言語研究のための統計入門』 くろしお出版
- 石川慎一郎 (2012) 『ベーシックコーパス言語学』 ひつじ書房
- エドワード・サイード著、今沢紀子訳 (1993) 『オリエンタリズム』 平凡社
- エドワード・サイード著、大橋洋一訳 (1998) 『文化と帝国主義』 みすず書房
- クロード・レヴィ・ストロース著、荒川幾男他訳 (1972) 『構造人類学』 みすず書房
- クロード・レヴィ・ストロース著、大橋保夫訳 (1996) 『神話と意味』 みすず書房
- A. J. グレマス著、田島宏、鳥居正文訳 (1988) 『構造意味論 方法の探求』 紀伊国屋書店
- ジョン・トムリンソン著、片岡信訳 (1997) 『文化帝国主義』 青土社
- トニー・マケナリー & アンドリュー・ハーディー著、石川慎一郎訳 (2014) 『概説コーパス言語学 手法・理論・実践』 ひつじ書房
- ハミッド・ダバシ著、早尾貴紀他訳 (2018) 『ポスト・オリエンタリズム』 作品社
- フェルディナン・ド・ソシュール著、町田健訳 (2016) 『新訳ソシュール一般言語学講義』 研究社
- ブシュカラ・ブラサド著、箕浦康子訳 (2018) 『質的研究のための理論入門』 ナカニシヤ出版
- ルート・ヴォダック & ミヒヤエル・マイヤー著、野呂香代子、神田靖子訳 (2018) 『批判的談話分析とは何か』 三元社
- ロラン・バルト著、花輪光訳 (1979) 『物語の構造分析』 みすず書房
- ロラン・バルト著、沢崎浩平訳 (1973) 『S/Z バルザック「サラジヌ」の構造分析』 みすず書房